

## 重要文化財 望月家住宅

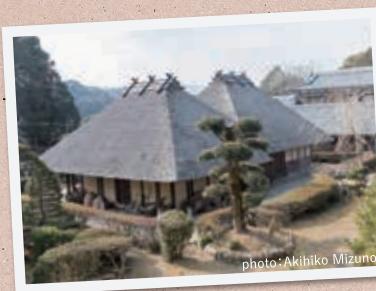


photo: Akihiko Mizuno

### 【東三河の釜屋建て】

愛知県の東三河地方には、この地方特有の二つの建物が軒を接して並ぶ民家があり、中でも新城市の望月家住宅は、古いかたちを残す民家として重要文化財に指定されています。

興味深いのが、二つの建物が内部でひとつなぎの空間になっていること。釜屋と呼ばれる土間と、居室のある主屋は屋根の谷の部分でつながり、間には檜を割り貫いた大きな雨樋が設けられて、排水に工夫されています。

このような形式を「釜屋建て」といい、全国に残る分棟型の民家の中でも珍しいタイプで、かつては東三河地方の豊川沿いをはじめ、天竜川流域や浜名湖の北部などに分布していたといいます。

屋内には天井がなく、むき出しの茅葺屋根の小屋組みがまるで巨大な傘のように頭上を覆い、また軒下で反射した光が小屋組みを浮かび上がらせる姿は、とても迫力ある美しい造形を見せてくれます。

望月家住宅は、昭和49年に重要文化財に指定された後、増築された部分や軒下の縁側を取り除いて、ほぼ創建時の姿に戻されました。現在は十四代当主の望月靖雄さんが管理し、一般に公開されています。

都心から少し離れると、地域特有の気候や風土に育まれた素晴らしい古民家が、意外なほど近くに残されています。



photo: Akihiko Mizuno

開く

博物館明治村には多くの住宅建築が移築・復原されているが、  
それらは必ずしも建築的な価値のみに重きを置いたものではないという。  
住宅には建築的価値を超えた何かが染み付くことがままある。

登録 / 2006年3月  
登録基準 / 国土の歴史的景観に寄与しているもの  
(主屋・離座敷・渡り廊・土蔵・作業場・高塀)



座敷。障子のプロポーションが美しい

その勝四郎が建てた主屋は、財界人や文化人たちの交流するサロンとしても使用するため、格式のある武家風にしつらえたと考えられています。

#### フォーマルな空間

堀部家住宅は、犬山城旧外堀の大手門にあつた桟形の前に位置し、明治初頭にはこの堀部家住宅は、犬山城の外堀の大手門にあつた桟形の前に位置し、明治初頭にはこの

場所で養蚕業を営んだといいます。現在の邸内は明治16年以降に整備されたもので、道路に面した黒い高塀は昭和に入つてから建てられました。

道路から眺めると、主屋の屋根と下屋の庇(ひさし)

高塀の屋根が重なつて一体感のある外觀となり、また2階の白い漆喰壁が間隔を開けて分割され、おおらかな表情をつくっています。

大戸に掛けられた白い暖簾をくぐると、吹き抜けの土間が奥の庭まで続き、でこぼこした三和土(たまき)が風合(ふうあ)いを帶びて美しいです。式台の先には畳の敷かれた和室が2列横並びで六間あり、一番奥の座敷には角柱に長押(なげし)がめぐり、床の間と床脇(とこわき)が備わった書院造となつていて、仏間とともに格式の高い部屋となっています。両側には縁側がめぐり、それぞれ趣の異なる庭に開かれ、障子を開け放すと、明るく開放的な広間にになります。

広間の中央には2階へ上がる箱階段があり、オブジェのような面白い景色をつくっています。2階は上り梁の見える広い空間となつていて、かつてはここで養蚕が行われていました。また、階段脇にある背の低い座敷には銀の屏風と甲冑が展示され、隠れ家の的なギャラリーとなっています。



和室との親和性も高い提灯工房

主屋 / 1883年(明治16年)

主屋 / 木造2階建て 切妻造 棟瓦葺き

棟梁 / 河村清右衛門(主屋)

大山市大字大山字南古寺272

<https://horibetei.com>



白と黒のコントラストが目を引く外観。以前は2階も黒漆喰で、白砂の前庭にも植栽が繁茂していた

## 旧堀部家住宅(木之下城伝承館 堀部邸)

武家の気品の漂う、民間運営の伝承館

### 犬山の武家風住宅



2階の座敷に飾られた甲冑

国宝犬山城をいたたく城下町にはたくさんの登録文化財があり、情緒ある町並みを形成しています。その中のひとつ、旧堀部家住宅は、武家の住まいの氣風を伝える、愛知でも数少ない邸宅です。

堀部家は、代々犬山城主の成瀬家に勘定方として仕えた家柄で、明治以降はその経験と実績を生かして金融業や運輸業を展開し、成功を収めました。特に十二代目堀部勝四郎は、犬山の商工会議所の重役を務め、濃尾地震で半壊した犬山城の修復に貢献し、また木曾川に架かる犬山橋の建設にも尽力した、地元の名士としても知られています。

### 活用のかたち

現在、旧堀部家住宅は犬山市が所有し、地元の歴史や文化を発信する「木之下城伝承館堀部邸」として使用されています。管理するNPO法人ニワリネットは、市側へ家賃を払つて運営する全国的に珍しい方式を採り、文化財をより自由に活用しています。

その一環として迎えられた店舗の「みな蔵」は、土間でカフェを経営し、隣接する和室で提灯工房を開き、作品制作やワークショップなどを積極的に行ってています。

提灯に彩られた邸宅は、以前よりも親しげに来館者を迎えてくれるようになります。

主屋 / 1883年(明治16年)  
主屋 / 木造2階建て 切妻造 棟瓦葺き  
棟梁 / 河村清右衛門(主屋)  
大山市大字大山字南古寺272

登録／2018年11月  
登録基準／造形の規範となっているもの（爲春亭・知足庵）  
國土の歴史的景観に寄与しているもの（正門・東門・待合・雪隱）



焼物の展示された、ひさごの間

コレクションを公開展示する古川美術館があり、爲三郎記念館はその分館にあたります。

### 古川爲三郎の邸宅

爲三郎記念館はもともと古川爲三郎の住まい、その前は料亭旅館の別館だったと伝えています。貴金属商から身を起こした爲三郎は、映画の興行や炭鉱の経営を経て、戦後に日本ヘラルド映画株式会社や不動産投資で成功を収めました。建物を含むこの土地を購入したのは昭和20年のことで、103歳で亡くなるまでこの家に住み続けました。

生前から篤志家として知られた爲三郎の意

が立つショップ側から入館します。

館内には数寄屋造の意匠が至るところに散りばめられ、目を楽しませてくれます。このようないくつもの凝ったつくりは、名古屋の茶の文化と深く関わっていて、数寄屋建築を作る際に茶の宗匠が監修を務め、庭や建物が洗練されていったといわれています。

爲三郎記念館の一一番の見所は、庭の広場からの爲春亭の眺めです。雁行する建物が庭の木々や植栽と調和し、庭地を流れるせせらぎの音や空気と一緒に、美しい景色をつくりあげています。また懸造りの軽やかな姿が、数寄の気分を高めているのもポイントです。

庭の奥には織田有樂齋が手掛けた国宝如庵に倣つた知足庵があり、風景に華を添えています。

### 近代数寄屋建築の意匠

木々の生い茂る邸内には、草庵風の立派な正門から入るのがおすすめです。迎え水が打たれたアプローチをゆっくり下ると、幽谷へ入るような気持ちになります。主屋の爲春亭の格調の高い玄関を通り過ぎ、その横の野点傘

が立つショップ側から入館します。

館内には数寄屋造の意匠が至るところに散

りばめられ、目を楽しませてくれます。この

ようないくつもの凝ったつくりは、名古屋の茶の文化と

深く関わっていて、数寄屋建築を作る際に茶

の宗匠が監修を務め、庭や建物が洗練されて

いたといわれています。

爲三郎記念館の一番の見所は、庭の広場か

らの爲春亭の眺めです。雁行する建物が庭の

木々や植栽と調和し、庭地を流れるせせらぎ

の音や空気と一緒に、美しい景色をつく

りあげています。また懸造りの軽やかな姿が、

数寄の気分を高めているのもポイントです。

庭の奥には織田有樂齋が手掛けた国宝如庵

に倣つた知足庵があり、風景に華を添えてい

### インスタレーションのある風景

爲三郎記念館のもうひとつ特徴が、和風の

空間で現代アートの展示やインスタレーションを行なっていることです。

インテリアデザイナー内田繁が手掛けたインスタレーションでは、

和室に自作の椅子とブールを設置し、反射した

光で空間を演出する作品が話題を呼びました。

そんな繊細な数寄屋造の世界を大胆にアレンジするアート・イベントは、古川美術館の職員と

協力して行われています。また開館前の苑内で

は、彼らが丁寧に掃除する姿を目にします。

爲三郎記念館の美しい風景と行き届いたおもてなしは、職員たちの努力によって支えられているのです。

### 覚王山の隠れ家アート・ミュージアム

名古屋の都心から少し離れた覚王山地区に、

オシャレで隠れ家のような和風建築のアート・

ミュージアム「爲三郎記念館」があります。

洒な数寄屋造の館内では美味しい抹茶と甘味

が提供され、丁重なおもてなしでハイソな気分

が味わえる、人気のスポットとなっています。

近くには実業家の古川爲三郎が収集した



爲春亭の庭からの眺め。雁行する配置や高床の構成、随所に見られる草庵風の意匠が名苑桂離宮を彷彿させる

## 爲三郎記念館

実業家古川爲三郎が愛した、潇洒な数寄屋建築



ケレン味のない格式の高い玄関



茶人の名にちなんだ茶室太郎庵

爲春亭／1934年（昭和9年）、  
知足庵／1936年（昭和11年）  
爲春亭／木造平屋建て（一部地下1階）入母屋造瓦葺き、  
知足庵／木造平屋建て（一部地下1階）入母屋造銅板葺き  
〔設計〕不明  
名古屋市千種区堀割町1-9  
<https://www.tsurukawa-museum.or.jp/memorial>

## 長崎居留地二十五番館

二十五番館です。元は、長崎港を見下ろす眺

次は、広いベランダが特徴的な長崎居留地  
現今は軍艦島の展示が行われていて、詳細な  
パネルや巨大な模型は見応え満点です。

黒漆喰に格子窓を開けた堅牢な外観の店に入ると、3層吹き抜けの背の高い土間が出迎えてくれます。木造の3階建てが一般に認められたのは明治前後のことです。大正8年には禁止されました。

東松家住宅の一番の見どころは2階の茶室です。土間上空に張り出した露地のような廊下を通ると、巧みに配された待合や茶室があり、吹き抜けに隣接した浮遊感のある空間をつくりだしています。



長崎居留地二十五番館のベランダ

めの良い南山手地区にあった建物で、同地区には大浦天主堂もあります。この家には我が国造船に功績を残した技師ジョン・コルダーが住んでいました。

正面に玄関を置き、左右対称に居室を配したベランダのある構成は、長崎の居留地でよく見られたコロニアル様式の住まいです。また、構造材と建具枠が一体となった和風建築的な細部も見どころです。

後方にはコーナーで繋がる別館があり、洋風の外観の奥には和室が設けられています。

現在は軍艦島の展示が行われていて、詳細な



長崎居留地二十五番館の鳥瞰。本館（左）と別館（右）から成り、ベランダが庇状に1段下がって柔らかい表情をついている

## 特集 3

# 博物館明治村の住まい

## 東松家住宅

愛知が誇る近代建築の聖地、博物館明治村では、近代日本の住宅史の変遷を实物で辿ることができます。最初に紹介するのは東松家住宅です。名古屋市の堀川沿いで油問屋を営んでいた東松家は、明治の中頃に堀川貯蓄銀行を開業し、それにあわせて建物を3階建てに増築した町家です。



東松家住宅の外観。堅牢で迫力ある姿



芝川又右衛門邸の外観

### 芝川又右衛門邸

最後は関西経済界の重鎮、芝川又右衛門の別荘です。この建物は阪神・淡路大震災の折に被災し、解体を惜しんだ所有者から寄贈を受け、一番新しく移築された建物になります。



芝川又右衛門邸の小座敷

設計者の武田五一は、スペニッシュ様式やセツション、それに数寄屋造の意匠を混ぜ合わせて、独自の美しい世界をつくりあげています。特に見事なのが2階の小座敷です。建具を開め切って細部の意匠がざわめき立つ瞬間は、思わず感嘆の声が漏れます。

芝川邸の移築と復原には、愛知で多くの古建築の修理や保存を手掛ける魚津社寺工務店が協力しています。またタイルに関してはINAXライブミュージアムのものづくり工房が担当し、芝川邸で蓄積された調査方法や復原の技術が旧本多忠次邸へと受け継がれました。



明治村では、復原された建物を通して当時の暮らしをリアルに体験することができます。150年間で劇的に変化した日本人の住まいを、ゆっくりと旅してみてはいかがでしょうか？



神戸山手西洋人住居のベランダ。列柱が美しい

### 神戸山手西洋人住居

長崎居留地二十五番館のすぐ隣にたつているのが、神戸山手西洋人住居です。階段を下つて建物へ近づくと、2階建てで浅葱色の美しいベランダがお迎えしてくれます。

この建物の見どころは、なんといってもベランダの列柱です。よく見る柱の数が違い、コーナーでは3本、正面玄関の前は2本配置されます。これは元の狭い敷地に対応した工夫で、ベランダの平面もし字の不整形ですが、それを感じさせない巧みなデザインです。

また奥には別棟の建物があり、2階にある客間には渡り廊下からしか入れないというアクリバティックな構成がとても面白いです。



神戸山手西洋人住居の渡り廊下

登録／2014年10月  
登録基準／造形の規範となっているもの



2階の客間。格式の高い書院造の床飾り

シャツとスラックスを着用し、質素儉約で凝り性、山や植物を愛し、潔癖症だったという忠次が、36歳のときに1年がかりで建てたのがこの建物になります。

設計に際して残された資料には、住宅設計の名手たちの作品や、日差しの角度計算、平面図やランプシェードのスケッチなどが記され、忠次の並々ならぬ思いが窺えます。

熟考の末、忠次が採用したのはスペニッシュ様式の洋館でした。

日本多邸のクリーム色の外壁やアーチが連續するベランダ、赤い洋瓦を葺いた屋根に、タイルをふんだんに用いた室内装飾は、スペニッシュ様式の特徴をよく表しています。

一方で忠次は、平面計画に中廊下型を採用しています。庭園側には団欒室や食堂、夫人室を配し、反対側には女中室や台所がまとめられています。

とりわけ目を引くのが随所に設けられた水回りです。玄関の壁泉をはじめ、外から直接入浴できる風呂には全面にタイルが張り巡られ、ステンドグラスと合わせて美しい空間となっています。

2階はさらに個性的な部屋が設えられています。庭に面して並ぶ和室には座敷飾りが付き、窓ぎわに縁を通すことで洋風の外観と和室を取り持っています。

また隣接するお茶室は、一転してアール・デコ調のデザインでまとめられています。忠次は紅茶を好み、この部屋だけにあつらえられた内装からは、凝り性の顔を垣間見ることができます。

2階へは子どもは入ることが許されなかつたといい、厳格なしきたりが最近まで残っていたことを感じさせます。

1931年(昭和6年)、2011-2年(平成24年)移築  
木造2階建て(一部鉄骨造)  
設計：本多忠次、白鳳社建築工務所  
岡崎市矢作町字足延40-1  
<https://www.city.okazaki.lg.jp/>  
1109/1162/p011774.html



2階のお茶室。アール・デコ調の什器がモダン

日本多邸のクリーム色の外壁やアーチが連續するベランダ、赤い洋瓦を葺いた屋根に、タイルをふんだんに用いた室内装飾は、スペニッシュ様式の特徴をよく表しています。

一方で忠次は、平面計画に中廊下型を採用しています。庭園側には団欒室や食堂、夫人室を配し、反対側には女中室や台所がまとめられています。

とりわけ目を引くのが随所に設けられた水回りです。玄関の壁泉をはじめ、外から直接入浴できる風呂には全面にタイルが張り巡られ、ステンドグラスと合わせて美しい空間となっています。

2階はさらに個性的な部屋が設えられています。庭に面して並ぶ和室には座敷飾りが付き、窓ぎわに縁を通すことで洋風の外観と和室を取り持っています。

また隣接するお茶室は、一転してアール・デコ調のデザインでまとめられています。忠次は紅茶を好み、この部屋だけにあつらえられた内装からは、凝り性の顔を垣間見ることができます。

2階へは子どもは入ることが許されなかつたといい、厳格なしきたりが最近まで残っていたことを感じさせます。

### こだわりの造作

忠次が、36歳のときに1年がかりで建てたのがこの建物になります。

設計に際して残された資料には、住宅設計の名手たちの作品や、日差しの角度計算、平面図やランプシェードのスケッチなどが記され、忠次の並々ならぬ思いが窺えます。

熟考の末、忠次が採用したのはスペニッシュ様式の洋館でした。

### 復原の到達点

忠次が亡くなった後、老朽化した建物は解体も検討されましたが、ご家族と研究者たちにより保存の道が探られ、本多家と縁の深い岡崎へ移築されることになりました。

丹念な調査を経て復原された建物は、その家で暮らしたご家族から見ても違和感のない出来栄えだったといいます。

夕暮れに佇む旧本多邸は、少し寂しそうにも見えます。それは、一心同体だった主人の帰りを、今も待ち続けているからなのかもしれません。



夕日を受ける日本多邸。クリーム色の外壁にアーチのベランダ、赤い洋瓦のスペニッシュ様式は、遠くからでもよく目立つ

photo:Akihiko Mizuno

## 日本多忠次邸

旧華族が丹精込めてつくりあげた、スペニッシュ様式の洋館

### 住宅設計の妙味

日本多忠次邸は、住宅設計の奥深さを伝えてくれる大切な建物です。それは、この住宅の設計を主人自らが手掛け、身体の一部のように神経を行き届かせて、ほぼ改築することなく約70年のあいだ暮らし続けたことに尽きています。

現在は岡崎市の東公園にたっていますが、以前は東京の世田谷区にあり、平成24年に同地へ移築・復原されました。

### 施主兼建築家、本多忠次

本多忠次は、徳川家康に仕えた本多忠勝の子孫にあたり、旧岡崎藩主や貴族議員を務めた子爵の家柄に生まれました。次男だった忠次は、帝大で学んだ後に家を出て不動産や株取引で生計を立てたといいます。



1階の風呂。タイルの復原はINAXライブミュージアムが担当した